

不二ノ腰遺跡最新出土遺物展

～古代の集落跡について～



会期：平成27年6月9日（火）～11月1日（日）

会場：熊谷市立熊谷図書館・郷土資料展示室（3階）

1 はじめに

平成25年度、市内石原にあります不二ノ腰遺跡の範囲内で分譲住宅建設に伴う発掘調査が行われました。不二ノ腰遺跡では、これまでに携帯電話の基地局の建設、分譲住宅建設、個人専用住宅建設が原因の発掘調査が行われてきました。いずれの調査においても古代（奈良・平安時代）の竪穴建物跡が発見され、古代の集落が集中して展開している様子が分かりました。今回の第4次調査でも、同じく古代の竪穴建物跡が発見され、集落の様子や実態を考える上で貴重な成果を得ました。

このたびは、その最新の発掘調査により発見された集落の、主に竪穴建物跡から出土した遺物を展示します。この展示を通して、今から1,200～1,100年前の熊谷ではどのような暮らしがあったかなど古代に思いを馳せ、古代の集落について理解を深めていただければ幸いです。

2 不二ノ腰遺跡と過去の発掘調査成果について

不二ノ腰遺跡は、市中央部西寄りの荒川左岸に広がる新期荒川扇状地に立地する奈良時代・平安時代（今から約1,300～1,100年前）の集落遺跡です。遺跡が形成された地形を見ますと、礫を多量に含む砂礫層やシルト層の地山に造られた集落跡です。調査により、竪穴建物跡3棟、土坑のほか、集落域の区画を意味すると思われる溝跡が検出されています。竪穴建物跡などは、前述した礫を多量に含む地形に果敢にも挑み苦勞して造ったと考えられ、堅牢かつ水はけの良い土地を敢えて選んで集落を形成したと思えます。検出された竪穴建物跡のうち1棟は、カマドの構築材に川原石を使用し、焚口付近を石組みの壁で形成していました。これは、恐らく被熱により壁が劣化するのを防ぐためのものと推定され、ここにも当時の人々の知恵が活かされていると思われます。



調査地点

3 第4次調査の成果

調査は、遺跡範囲の西端部において行われました。また、西端でも北西端にあたり、遺跡の広がりとその範囲がほぼ確定したものと判断されます。なお、遺跡範囲の北縁には現在水路が東西に流れ遺跡範囲を限っていますが、この水路が旧河川の流路と一致する可能性が考えられ、この旧河川の流路南において東西に細長く所在する微高地に本遺跡が立地します。また、旧河川を挟んで北側の微高地には、本遺跡とほぼ同じ時期、奈良・平安時代の集落跡である高根遺跡が所在します。

検出された遺構は、竪穴建物跡5棟のほか、土坑、ピット、溝跡などです。竪穴建物跡はいずれも9世紀代に所属するものでした。

出土遺物は、土師器坏・甕・台付甕、須恵器坏・蓋・甕・壺などが見られ、第2・4・5号竪穴建物跡からは比較的まとまった個体数の土器が出土しました。土師器坏には、口縁部内外に油煙が付着する灯明皿用途のものが多く見られました。また、展示はしていませんが、第3号竪穴建物跡からは羽口（鍛冶炉のふいごの送風管）の破片が出土し、製鉄関連工房の可能性が考えられる建物です。

この度は、多数出土した遺物のうち、第1・2・4・5号竪穴建物跡から出土した遺物を中心に展示しました。

4 展示資料を出土した遺構について

(1) 第4次調査 第1号竪穴建物跡

A区の北西隅において、住居跡の一部が検出されました。

遺物は、土師器坏・台付甕、須恵器坏・甕などが出土しました。時期は、9世紀後半と考えられます。

(2) 第4次調査 第2号竪穴建物跡

A区の東半において、南部の一部が未検出の状態で見出されました。カマドは西壁の中央に設置され、住居の主軸方位は、西に50°傾いていました。

遺物は、住居のほぼ全体から出土し、土師器坏・台付甕・甕、須恵器坏・甕・壺などが出土しました。土師器坏には、灯明皿として使われたものが含まれていました。時期は、9世紀後半と考えられます。

(3) 第4次調査 第4号竪穴建物跡

B区の中央部において、南西の一部が未検出の状態で見出されました。カマドは北壁の西寄りに設置され、住居の主軸方位は、西に25°傾いていました。

遺物は、住居のほぼ全体から出土し、土師器坏・台付甕・甕、須恵器坏・甕などが出土しました。土師器坏には、第2号竪穴建物跡と同様に

灯明皿用途のものが含まれていました。時期は、9世紀前半が主体と考えられます。

(4) 第4次調査 第5号竪穴建物跡

C区のやや南寄りにおいて、カマドを除きほぼ全体が分かる状態で検出されました。カマドは東壁の南寄りに設置され、住居の主軸方位は、東に43°傾いていました。

遺物は、主に住居のカマド前付近から出土し、土師器坏・台付甕・甕、須恵器坏・蓋・壺、刀子などが出土しました。展示した土師器甕は、カマドの左右袖の補強材として使われたものとも考えられます。時期は、9世紀前半が主体と考えられます。

(5) 第1次調査 第1号竪穴建物跡

調査区の中央部やや北寄りにおいて検出されました。住居は、礫を多量に含む地山を掘り込んで造られていました。カマドは東壁の中央に設置され、焚口左右の被熱部にこぶし大の川原石が積まれていました。住居の主軸方位は、東に47°傾いていました。

遺物は、カマド付近を中心に住居のほぼ全体から出土し、土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕・壺などが出土しました。時期は、9世紀前半が主体と考えられます。

(6) 第1次調査 第3号竪穴建物跡

調査区の北壁付近、第1号竪穴建物跡と一部重複して、南半が検出されました。住居は、第1号竪穴建物跡と同様に礫を多量に含む地山を掘り込んで造られていました。カマドは東壁の南隅に設置され、住居の主軸方位は、東に56°傾いていました。

土師器坏・甕・台付甕、須恵器坏・甕、砥石、刀子などが出土しました。時期は、9世紀後半と考えられます。

(7) 第1次調査 第24号土坑

調査区の東部、第1号溝跡と重複して検出され、平面形は、長方形でした。

遺物は、比較的良好な状態で多数出土し、土師器坏・台付甕・甕、須恵器坏・蓋・甕・壺、刀子などが出土しました。時期は、9世紀後半と考えられます。

(8) 第1次調査 第1号溝跡

調査区の東半において検出され、南西—北東方向の溝跡です。幅が約2～5mの溝で、接続する溝跡（第2号溝跡）と併せて、住居がある集落域を区切る区画溝の機能をもっていたとも考えられます。

遺物は、土師器坏・台付甕・甕、須恵器坏・蓋・甕などが出土し、

須恵器坏が多数を占めます。時期は、9世紀が中心ですが、8世紀前半～10世紀前半と長期間使われた可能性が考えられます。

5 おわりに

不二ノ腰遺跡では、4次にわたる発掘調査により、竪穴建物跡が8棟、集落を画する溝跡、多数の土坑やピットが検出され、主に竪穴建物跡が属する時期である9世紀代の土師器・須恵器などの遺物が多数出土しました。

これまでに調査が行われたか所は、遺跡範囲西端のごく一部ではありますが、古代の集落の様子的一端が徐々にではありますが、明らかになってきました。それは、住まいを造るのに際し困難な地形条件を上手に克服していることです。

皆さんも、この展示を通して、自然と闘^{たたか}いつつも寄り添い、たくましく生きていた祖先の人々の英知を感じていただければ幸いです。



第4次調査区全景

左上：A区（東から）

右上：B区（南から）

右下：C区（東から）

平成27年6月2日発行

編集・発行：熊谷市立江南文化財センター（熊谷市教育委員会 社会教育課 文化財保護係）